

＜今日の説教のポイント 出エジプト記1章15～2章10節＞

1 「神を畏れていたのです」したこと(17)、そして、なされたこと(21)。

エジプト王ファラオは、「虐待されればされるほど増え広がる」(12)イスラエル人に対して、二人のヘブライ人の助産婦に生まれて来る男の子殺害を命じます。しかし、彼女らは賢く振舞い、その命令に従いませんでした。この話で注目すべきは、二度使われている「助産婦たちは神を畏れていたのです」(17,21)という言葉です。彼女たちは神様を畏れることを何よりも重んじることを先に立て、考え、行動したのです。その結果、不妊の女性であったはずの助産婦たちに子どもが授けられたのです。「神を畏れて」生きることの大切さを教えられる話です。

2 人間ファラオの策略はことごとく神様によって破られた！

ファラオはついに3度目の策略、彼の全ての民(「全国民」[22]の直訳)にイスラエル人の生まれてきた男の子の殺害を命じます。しかし、これも神様の不思議な、驚くべきなさり方によって妨げられます。彼、ファラオは自分の民を支配しているように見えても神ではないのです。この3度目のひどいファラオの仕打ちの中で、モーセを与えられるという、一つのはっきりした神様の出来事に移って行きます。その話の中に幾つもの含蓄ある表現が出て来ます。それを次に紹介します。

3 全てのことに神様のなさり方を考える - それが信仰者がなすこと！

モーセの母が「その子がかわいかったのを見て」(2)話は開始されます。この表現は創世記1:4, 10, 12の「神は～を見て、良しとされた」、と似ています。母はこの世界と命を生み出した神の姿を取ったのです。命を奪うファラオと違い、一番自然なあるべき姿を彼女は取ったのです。だからその先に道は続いていたのです。男の子を入れた「籠」(3)はノアの「箱舟」(6:14)とも訳されている言葉です。神様が男の子を守られているのです。また、王女はどうして助けたのでしょうか？ 民族の違いを越えて人が持つ同情(神様が人を造られた箇所起因する[創世記1:27])を考えるべきでしょう。そして、モーセの名の由来となる「水の中から引き上げた」(10)は、モーセがイスラエル人を「エジプトから連れ出す」(3:10)に繋がります(使徒言行録7:21-22 王家で育てられた意味)。私たちも事を焦らず、神様のなさり方を考えて生きる者になりたいものです。